

## 似たような恋をした娘より

高橋和美

山形県・37歳・公務員

あなたの存在を知ったのは、確か小学校2年生の頃。それからずいぶん長い時間が経ってしまいました。私はかたくなに会うことを拒んできました。たぶん、これからも。

私を生んでくれた人、私に顔も体つきも似ているという、同じこの街のどこかに暮らしているあなた。言うこともできない乳飲み子を置いて、恋のために家を出たあなた。残された赤ん坊を一人家に残し帰らない「父」という肩書きの人。空腹と濡れたおむつの不快さに気が狂ったように泣き続けていた私を助けてくれたのは、通りがかりの人だったそうですよ。

恨みとか憎しみとかの感情ではなく、あなたのことを「関係のない人」と思い込むようにしてきました。あなたから選ばれなかったという事実は、あなたの存在を無視することでは消えないと思っていたのです。「私は不幸でもかわいそうでもない」と自分に言い聞かせ、誰にも弱味を見せないことが私のプライドだったのです。そんな私に、テレビで

やっているような「涙の再会」なんて似合うはずも、できるわけありません。

でも、素直に自分をさらけ出すことができる人とめぐりあい、「泣いてもいいんだよ」と言われ、その人の胸に抱き寄せられ、泣けば楽になる時もあることを初めて知り、強がらない自分がいとおしく思えるようになった今、何故かあなたに想いを伝えておこうと思いたちました。

ずっとあなたが気になっていた。私の記憶に存在しないあなたのぬくもりを、いつもどこかで探し求めていた。これからも会うつもりがないのは、もはやわだかまりではなく、あなたと私の近くにいる家族に対する思いやりです。あなたが今でも私を気づかせてくれていることを素直に喜び、年老いたあなたの健康を心から願っていますよ。あなたと似たような恋をした娘を、心の中で見守っていて下さい。おかあさん、強がって生きてきた娘からの最初で最後の恋文です。

※一気に書き上げた後、これはおかあさんへの「出せなかった想い」であると共に、「この手紙を書ききりかけとなった人」に対する恋文でもあった、と思いました。